



感情表現と論理性と

拓殖大学 顧問 渡辺 利夫

文章というのは不思議なものです。それまでの人生の過程で直面したさまざまな経験について、あれやこれや思いを巡らせてみても、その像はぼんやりしたものでしかないのですが、これを思い切って文章化してみますと、その文章の背後から連想が次々と浮かんで再現され、書き出す前には想像できなかったようなストーリーができていってきます。

「人生量」という言葉はありませんが、私はあつてもいいと思うのです。一人の人間が生涯を通じてどのくらいの量の人生を送ったのか、この量はおそらくこの人間が一生の間どのくらいの量の感情を抱いたか、私はこの量が多い人ほどその人の人生は豊かなものだと思うのです。「人生量」が「感情量」によって測られるとすれば、それは文章化された感情表現量によってだと私は考えます。優れた作文の一つの条件は、感情表現の語彙が見事に構成されている文章だということです。

中学・高校生の部の山本旭隼君の作

文には、知り合いの台湾人のおじさんとの交流を感情豊かに描いて、本当に心温まるものを感じさせます。おじさんが台湾に帰る日、おじさんは山本君にこう伝え、山本君をジンとさせるシーンがあります。いいですね。

「自分で自分を臆病だと思えば消極的になって人は寄ってこないし、活発だと思えば積極的になって自然と周りに輪ができる。あなたの思い通りの自分を、ずっと思い浮かべなさい。それが積み重なって、きつと理想の自分になるから。いつもに似合わない丁寧な口ぶりで、そうおじさんは添えて旅立った。」

対照的に、大学生の部の永井光洋君の作文は、ずいぶんと論理的です。台湾の海洋教育が大変に系統的で組織的であることを学習と調査を通じて理解し、このことを論理的でしっかりと文章で描いていて感心させられました。若い人の文章に求められるのは、先に述べた感情表現を豊かにすることとかならず、文章を論理的に仕立てることだと、私は考えます。

